

令和4年度 第3回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】 令和4年8月25日（木）

午後1時30分～午後3時

【会場】 伊東市生涯学習センターひぐらし会館 ホール

1 出席者

発言者：熱海市・伊東市において様々な分野で活躍中の方
4名（男性2名、女性2名）

2 発言者意見

番号	分野	項目	頁
発言者 1	林業	副業きこりとしての活動と市民と作る森林空間の創出	2、 18、19
2	農業 六次産業化	熱海橙の六次産業化による栽培の安定化と加工商品開発	4、18
3	移住 文化振興	音楽を通じた地域活性化、文化振興のための施設・設備の整備	8、19
4	福祉	垣根のない交流を通じた共生型福祉サービスの実現	11、18
傍聴者 1	-	県立伊東高校の跡地利用について	21

【川勝知事】 皆さま、どうもお暑うございます。この「平太さんと語ろう」、今回は熱海市と伊東市の代表の方々をお迎えいたしまして、伊東市での開催に相成りました。昨年の1月に予定していたところでございますけれども、コロナがなかなか収まりませんで、また7月3日には誠に痛ましい惨事が起こりまして、そうしたことから延び延びになっておりましたけれども、ようやくこのほど開催する運びになりました。

十分に感染対策を取って、多くの方にこちらにお越しいただく事が出来ませんので、YouTubeでの配信ということでもございます。

今日来る途中、マリンタウンですか、道の駅ですか、関東圏からのですね、車で満杯になっておまして、人々の、こちらへの憧れが戻ってきてるなあと。こういう厳しい中ですが、いやむしろ厳しい中だからこそ、こういう空気のきれいな、また気持ち安らげるような所に、関東圏から来られているということを実感して、こちらに来た次第でございます。

さて、この「平太さんと語ろう」というのはですね、私がほとんど語りません。今日はこちらに熱海市ですね、こちらに伊東市の若い代表の方たちのお話をしっかり承ると。ただしかし、馬耳東風ではいけませんので、お聞きして、我々がすぐにできることはすぐに実行すると。また私がですね、ここで答えできることがあるならば、ここで答えいたします。

そしてまた、聞くだけではなくて、お聞きしたことを県政に活かすということが目的でございますので、仮にこの場で答えられなかった場合はですね、持ち帰りまして必ずそれはきちっとご返答申し上げ、対応すると、まあこういうことで、今まで76回やって参りました。

こういう厳しい時でございますが、きっと今日はですね、明るい話題もお聞きできるかなということで、またそのことが他の地域の県政に活かせるんではないかということも、期待しているところでございます。限られた時間ではございますけれども、この時間、有効に使いたいと存じます。何卒よろしくお願いを申し上げます。

【発言者1】 はい、よろしくお願いをいたします。NPO法人熱海キコリーズ代表としてまいりました。座って失礼します。

私は、10年前に熱海に移住してまいりました。そして出身はですね、飛騨の高山、岐阜県飛騨高山で、森に囲まれた所で森と戯れながら過ごしてきた人間ですので、今熱海

キコリーズとして、森に関わりながら活動できて、熱海に住めているというのは、非常に楽しく光栄に思っております。

そんな中で、今日はちょっとキコリーズの活動の内容から熱海を感じていただければと思っております。今スクリーンに写ってますね。我々の団体は熱海で森林保全活動を行うNPO法人で2016年、熱海市の林業研修の仲間から生まれた団体です。

スローガンとしては、「熱海の森林に新しい風を」ということで、間伐をしながら、そして熱海という立地、観光地であることも含めて、林業として新しい風を吹き込んでいきたいなという思いのもと、活動してまいりました。

今日は、特徴が二つ、ございますのでお話しします。まず一つ目の特徴です。我々はちょっと働き方にも関わるんですが、週末に副業できこりをやっています。我々様々な本業を持ちながら、副業きこり、約20名の男女合わせて、20代から70代ですね、年齢も超えて職業も超えて、けども、森の中で一つ大事な目標に向かって林業に取り組んでいるという、ちょっとそういう仲間たちがユニークになります。

我々はですね、今見ていただいたように、さまざまな職業の人たちでありながらも、まあ最初はそういう下草刈り・選木だったり、そして間伐ですね、間伐・造材だったり。間伐して森を元気にするっていうところから最初始めたんですけども、やっぱり伐りっ放しで間伐材を置いてくことへの環境問題への配慮だったり、本当にもったいないなとか。あとは熱海市内からも、ぜひ熱海の木を使いたいという声もいただいてですね、そういった材を出せる道を作って、そして今は製材をしたり熱海市内で活用するというところまで、ゆっくりですけどもさせていただいています。

それで、ここに書いてある道がですね、今ちょうどいろんな道を作ってる中で、この道自体は材を出す、木材を出す道というだけではなくて、森林浴セラピーだったりとか、皆さんがもっと森林体験ができる場所づくりにもなっていくように、モデル林を構築しています。

それで、熱海市内でどのように活用してきたかというものは、皆様にお配りしているこのチラシの中に、我々で、空間づくりであったりとか、雑貨ですね、を作ってるものがございます。この中の雑貨の中にアロマオイル置きというものがあまして、この次お話しされる、シトライカンパニーの橙を使ったアロマオイルとヒノキを混ぜて、アロマを楽しんでもらう雑貨なんかも作ってみました。

このような形で、熱海の商業施設、カフェ、ホテルだったりでも、少しずつそういっ

た熱海産のヒノキ、ヒノキ林なんですけれども、針葉樹なんですけれども、そういったものに親しみを持っていただくように、街への還元もしております。

そして特徴の二つ目なんですけれども、我々はそういう、仲間たちが森好き、森を大切にしたいという思いから集まって、多種多様な技術だったり、経験がある中で、様々な目の前にある課題を解決する。熱海ですと、実は63%も森林がある中で、放置林があるという所で、我々はその集団で、副業きこり団体としてその課題に立ち向かっているという形になります。

もう一つ特徴がありまして、すごく心がけて活動してるのは一般市民の方と一緒に作る森林空間、というところをやってまいりました。今、具体的にはですね、林野庁も、今掲げているんですが、フォレストライフスタイル、フォレストスタイルということで、森林空間をみんなで作って、関係人口を増やしていきましょう、という取り組みがございしますが、我々もちょうど一昨年、今クラウドファンディングと林業を掛け合わせて、間伐材ウッドデッキを森に作ろうという取り組みをいたしました。クラウドファンディングと聞くと、資金集めというふうに皆さん最初思われるかなと思うんですが、この取り組みは仲間を集めて、いろんな方と一緒に森に入ってくださいという取り組みでした。具体的には、みんなで森林整備とか階段作り、入りやすい森づくりを我々が持っている知識とともにお伝えしながら一緒にやったりとか、あとはみんなで作る間伐材ウッドデッキを作ったり、そしてあとは、植樹だったりの体験ですね、生態系、植物の多様性のところを育むようなところだったりとか、あとはできたそのウッドデッキの広場、森の中で鳥の巣箱、これは作ったりしてですね、一緒に鳥と共生できる森づくりみたいなことをしています。

このように、今紹介したのは一例なんですけど、もう一つの特徴としては、一般の市民の皆様と森を共につくることで、ちょっと遠くに感じている森という存在に愛着を持っていただいて、身近な存在になってほしいなあとということで森林空間づくりを目指しております。

はい、ありがとうございます。以上になります。

【発言者2】 皆さま、改めましてこんにちは。

皆さん、突然ですが橙って果実はご存知ですか。橙は木に成ってから2年、3年と実が落ちにくいことから、代々つながる縁起物として、お正月の鏡餅の上に乗っている、

小さなみかんみたいな果実です。ちなみに今日お配りした、うちのポップの表紙にある当社ブランド岡野屋だいだいのロゴマーク、ちょっと見ていただいてもよろしいですか。何かに見えませんか？これ実は、鏡餅を上から見て、橙を中心に波紋を起こし、世界に広げるという意味が込められたロゴになります。

それでは、私と橙との出会いから農業の現状、今後の展開、未来に向けたお話をさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

橙農家さんとの出会いは、4年前、商工会議所の方から、「大きな橙農家さんが畑の縮小を考えているんだけど、一度会って話を聞いてみない？」と声をかけていただいたのが始まりです。

その方と会い、お話をしている中で、「橙は熱海の宝だから本当は残したいけど、歳を考えると続けていくのは難しい」という言葉を聞き、私は、直感でしたが、橙を次世代、未来へつなげるための架け橋になることが自分の人生の役目と感じ、農業の世界に飛び込みました。

はじめに、いろいろな農家さんとの意見交換から、農業と柑橘類の現状を知り、3つの問題点に注目をしました。①他の地域と比べて柑橘類の価値が低く、知名度と単価が上がりにくい。②橙のA級品はお正月のお飾り用に出荷はできるが、B級品の多くは破棄されている。年々お飾りの需要も低下し、A級品でも今後の買取単価への影響が懸念される。③近隣にB級品でも買い取れる加工商品製造工場がない。この3つの問題点を解決するには、当社での六次産業化が第一歩と考え、事業計画案を作り、ある場所に相談に行きました。そこで担当者の方が教えてくれました。「商品は作れても皆さん販路が作れず失敗するので、発言者2さんも考え直して下さい」と。失敗することが前提で進む話し合いに、私は逆に開き直ることができました。失敗をして責任とるのは自分だし、思いっきり勝負して、世界で販売出来る商品を作ろう、と考え、もうそこからワクワクは止まりません。そこから沢山の方の協力とアドバイスにより、今小さな製造工房を構え、果汁加工や、橙を活かすための高付加価値商品の研究に取り組み、六次産業がスタートしました。

現在の代表的な商品として、エッセンシャルオイル、橙マーマレード、伊豆ピクルスを製造。伊豆ピクルスの食材には県内野菜のB級品を使用し、橙からは天然柑橘ビネガーを抽出、野菜はカットして使用することで食品ロスをなくす、SDGs「つくる責任つかう責任」を果たすことができると考え、商品化をしました。

令和3年度には飲食3団体が中心となり、私も所属している熱海だいたい実行委員会が発足。そこで考案された熱海だいたいサワーは市内約70店舗で取り扱いをしていたが、橙の消費に大きく貢献をもたらすとともに、地元、観光のお客様からも美味しいと好評をいただいています。

使用量が増えたことで当園で栽培した7トンに加え、去年は2トン、今年5トン、来年は7トンの買い取りを打診中ですが、それでも余ってしまうのが現状です。

私は農業と兼業にてタクシードライバーとして働き、設備投資にも力を入れています。今後、熱海・伊東地区で栽培された全ての柑橘類の買取、商品化ができる六次産業規模には、まだ達していません。そこで、現在当社で進める更なる事業計画を2つ、簡単に説明させていただきます。

農業10年計画。静岡大学農学部の教授の協力により、橙の低木化、及びトゲの少ない苗木を育てる研究中。高所での収穫作業とトゲに刺さるといった危険性が低くなるということで、若手女性や主婦層、副業での農業参入が容易となる。同時に観光での橙狩り体験を行うことで、知名度の向上も可能である。

加工商品5年計画。3品の新商品のレシピを考案中。1商品を例として、令和4年度から3年間は外注にて製造。製造場所は決定済み。全国への販売ルートと販売量の実績を作り、4年目からは自社工場建築予定にて、製造許可を取り販売を開始。5年後を目標に橙の加工品を世界各国で販売するための戦略も同時考案中です。

事業計画実施から見る効果。農作業の省略化と工場にて直接買取、中間マージンを省くことで買取価格を安定させ、3つの問題を解決し、農業を守り次世代・未来につなげることができるかと確信をしています。

ここで県行政への要望です。事業計画にある自社工場開設と農業研究に対して、失敗を恐れずに前向きなサポートを強く要望いたします。

そして、これまでの活動を私一人で行ってきたわけではありません。勤務先の熱海小形タクシー社長、社員皆様のご協力と、熱海商工会議所、熱海市役所、三島信用金庫熱海支店、関係各所の方は、私の大変だろうということに先回りをして、書類づくりや相談に乗ってくれています。市内外を含め、たくさんの民間企業の方からも協力をしていただいています。

最後に農業と橙の未来に向け、川勝知事、県・国の行政の皆さん、そして、この話が静岡県出身の農林水産副大臣、勝俣衆議院議員へと伝われば、一度畑に来てください。

畑からの景色、花の香り、橙の大きさなどワクワクすることがたくさんあります。私たちと一緒に熱海の宝・橙を、静岡の宝・橙へと成長させ、世界の橙を目指しましょう。皆様のご来園を心よりお待ちしております。ご清聴ありがとうございました。

【川勝知事】 どうも。発言者1さんと発言者2さん、お昼をご一緒したんですよ。明るいなあと思ったんですね。ですから今日多分ですね、明るいお話をされるんじゃないかと思っていたら、その通りになりまして喜んでおります。

発言者1さん、10年前にこちらに移住されたということですが、あの、まずですね、2016年という今から6年前ですね、森林の、林業の研修を受けられたと。これがきっかけになったと言われて。実は研修が大事だってことをですね、今の話聞いて気がつきましたね。そしてご出身が、木曾は山の中と言いますが、飛騨高山の。ですからまあ本当に日本を代表するですね、林業地帯というか、森林の中でお育ちになったので、この熱海と林業というのは、まず結びつかないですね。通常、温泉、行楽そして景色、これがですね、第一次産業、しかも林業というのは結びつかないと。おそらくそのパーセンテージはですね、2%にもいかないんじゃないか、1%ぐらいじゃないかと思います。おそらく80%以上の人たちが第三次産業、サービス産業に従事されていると思います。

しかしですね、発言者1さん言われましたね。63%が森林だと。じゃあ日本と一緒にじゃないですか。あるいは静岡県と一緒にですね。だいたい三分の二くらいがですね、森林なわけですよ。熱海も例外じゃないと。そしてしかも、放置されている森があるとか、林があるということで、そこに手を入れよう、ということで始まったっていうわけですね。

ですから始まったばかりですけども、先ほどのスライドの中にお仲間の写真載ってましたけども、その中にですね、発言者1さんのようにはつらつとした女性の姿も見えましたね。ですから林業というと、きこりというと、男性のイメージが強いですけども、女性が働いてるんだっていうことがですね、文字通り、自らモデルになってらっしゃって、キコリーズの中に有力な女性がいるっていうのも、これ誠にもってですね、新しい試みで、熱海にキコリーズありということを知って、そして私、新聞でも見ましたけれども、このキコリーズの方たちがこの間の土石流の後、いろんな、なんて言うんですかね、ちょっとした足場を組むとか、あるいは具合の悪い所に仮柱を立てて支えるとかですね、これをされてるわけですね。それでこういう緊急事態にですね、このキコリーズ

がいたというのが本当にありがたいと。それから何か、お地蔵様ですか逢初地蔵堂ですか、それも新聞に載ってましたけれども、その復興にも力を、しかもお地蔵様が無傷で発見というわけで、それをですね、きちっと安置されて、みなさんが心のよりどころを見つけられたというのは本当に素晴らしい活動で、それにとどまらず、森林それ自体が森林空間として癒しの空間になるし、またこの役に立つものが作れると。でさらにその森林の中に息づいている野鳥とかですね、そういうものを餌の少ない冬なんかにはですね、ちょっと餌をやっというてやったり、巣箱を作って差し上げるっていうのは、誠にもってですね、熱海の新しい、これ顔になるんじゃないかというふうに思いますね。

そして今、多くの方たちが東京から脱出しようとしてますけれども、今日の伊東の、そののマリントウンでもそうですけれども、ほとんど首都圏の方ですから。訪れてよし、そして住んでよしというふうなですね、そうした、新しい顔を見せる一つの場面を、私たち今見たんじゃないかというふうに思いましたね。ほんと感じ入りました。

そして発言者2さんはですね。なんて言いますか、発言者2さんも若いわけですね。若いっていうのはこれまず仕事ですね。熱海の、橙は熱海の宝だと言う。そうか自分は熱海に生まれたんだと。熱海の宝は橙だと。それを代々繋がなくてどうするんだと。そもそも鏡餅の魅力は、あれを代々繋げていくことじゃないかということで、全部引っ掛けちゃうわけですね。それで柑橘類はシトラスと言いますが、そのシトラスにトライ、やってみるということを引っ掛けて、シトラスのシトラとトライのイをやってシトライということでですね。もうこの会社の名前に、もう発言者2さんのファイティング・スピリッツっていうか、前向きの姿勢が表れてますね。

そしてまあ2トン、5トン、次7トンだと言うんですから、本当に大丈夫かなと思うくらい作れているということですね。今70店舗ぐらいに供給されているって、今お話をいただきましたけれども、まずは伊豆半島を全部制覇したらどうかと。次は東部制覇したらどうかと。そういうことですね、近隣をしっかり押さえていただいて、近隣自体もですね、相当お店もあるはずですから。ですから、何ておっしゃったっけ、この橙、熱海だいたいサワーですか、これを飲まなければ熱海に来たことにならないということですね、今、発言者2さんは、なんかタクシーのドライバーとしても有名らしくて、ですから、あなただいたいサワーの発言者2さん？ということで、タクシーの運転手をやってらっしゃるとですね、人気者だそうです。そういうですね、こういう方が、こういう厳しい時代ですね、前向きにやってらっしゃるっていうのは大きな希望ですね。しかも

いきなり世界を目指すと言われました。

実は先ほどお聞きしたらですね、従業員の中には感染症にかかった人がいるんですって。自分がかからないって言うんですよ。どうしてだか分かるかって。そしたらみんなが言いましたよ。だいたいパワーでしょうと。このパワーがですね、発言者2さんを支えてると。まだ機能性ですね、チェックはされてません。これからしていくべきでしょう。ひょっとするとね、お茶もそうだったんですけれども、何が効くか分からない。しかしながら、薬食同源ですから、食の中にですね、体の健康を作る、抵抗力を作る、抗体を作るものがあるに違いありません。そのうちの一つである可能性もあるということですね。サポートをお願いしたいとおっしゃいましたので、ぜひサポートをさせていただきたいと。どういうサポートができるかはですね、具体的なサポートはですね、内容に即して。まずは現場を見なくちゃいけないと。今日帰りに寄ってよろしいでしょうか。(発言者2がうなずく) じゃあ帰りに寄ることにします。よろしくお願ひします。それでまず現場見せていただいて、それからですね、そこで必要なことをお聞きして、そして支援をしていきたいと。

しかしながら、一方でですね、あまり無理していただきたくない。なにしろタクシーの仕事もきついですし、農繁期にはおそらく橙収穫の時もきついに違いありませんので、無理していただかないように。しかし兼業というやり方はいいですね。何か一方で安心を取れますからね。

それからもう一つ偉いと思ったのはですね、静大の先生にちゃんと何が問題かと、トゲをどうしたらいいかとかですね、女性がこういうものをやるのにどういう難点があって、克服するにはどうしたらいいかと。やっぱりですね、徹底的にですね、産官学と言いますけれども、この専門家、案外皆さん知らないけど、本当にたくさんいらっしゃるんですよ。県の研究所にも専門家がいます。その専門家の意見を聞くっていうのはですね、前向きにこうって課題が何かを聞けばですね、必ず解決、あるいはそれを研究している人がいますので、それはまあ新しいパワーになりますから、そういうことも含めてですね、間を取り持つことも県のサポートの1つとしたいと思いますが、発言者1さんと発言者2さん、前向きな明るい話をしていただきまして、ありがとうございました。

【発言者3】 座ったままで失礼いたします。

伊東市に暮らして、先程ご紹介いただきましたとおりいろいろやっています。私は伊東

に来て6年、移住してきて6年経ったところです。移住してきて、私は北海道の札幌出身なんですけど、東京で15、6年ぐらい音楽の活動をしたり、いろいろしていました。それで、その移住してきた時は上の娘が3歳で、下の息子が生後2カ月だったんですね。来てみた時に、私自身がもともと自分で音楽もやるんですけど、見るのも好きなんですけど、伊東に来てみたらあまりコンサートとかなく、しかもそもそも子どもと行ける機会がなく、だったら自分で作ってしまおうと思って、0歳から入れるジャズコンサートというのを企画して、やることにしました。

でもやるって決めた時に、なんかいろんな人から伊東には芸術文化なんかないから、そんなのやっても誰も来ないよって言われたんです。でも、できないよって言われても、やってみないと分からないので、自分なりにいろいろ工夫してやってみたんですけど、最初はやっぱり、どこの、なんて言うんですかね、機会でもそうだと思うんですけど、ある程度実績がないと、補助を得られたりとか、助成金とかもいただけないので、結構持ち出しになって、ウン十万円かな、赤字を最初の機会は作ってしまいました。でもそれがあつたおかげで、次の時には工夫してやって、やっぱり地域ごとにイベントのやり方の工夫とか、PRの仕方っていうのがあるので、それをやりながら見つけていって、2回目にやった時には、こちらのホール200何席かあるんですけど、前売り完売するぐらい、まあちょっとダメなんですけど、消防法的に、人がオーバーするぐらい入りまして、なのでその後は、伊豆新聞さんも静岡新聞さんも取り上げてくださって、その後の機会も何回か続けていくことができるようになって、いろんなミュージシャンに来ていただいて、ただコンサートをやるんじゃなくて子どもの時からちゃんと一流の素晴らしい音楽、生の音楽を体験してもらいたいっていうコンセプトがあつたので、私が東京でやってきた中で知り合ったミュージシャンに来てもらって、素晴らしい音楽を楽しんでもらって、ミュージシャンに伊豆も楽しんでもらいたいっていう、両方の思いがあつて、それで私、家で民泊もやってるので、そこに泊まってもらって、一緒に伊東の街の中も楽しんでもらう、というふうに毎回やってきています。

コロナになってしまつて、ならなければ、本当はイタリアとかスウェーデンとか、オランダとかからも伊東に来たい、という話が本当はあつて、大使館の後援を得ているミュージシャンとかも来るはずで、私が音楽家、専門で通訳とか翻訳とかもやっていることもあつて、海外のアーティストも、東京とか大阪ももちろんツアーで周る合間で寄りたいていう方もいらっしゃるのです。

その時にちょっと困ったのが、やりやすいスペースが、200 席って結構大変なんですよ、お客さん集めるのが。本当は 100 席ぐらいの、できれば可動式のホールとか。その、お子さんたちが来る時にも、ちっちゃい子ってやっぱり、靴履いてない子とかだと床とか這っちゃったりする時に、やっぱり親御さんが心配したりするので、その靴が脱いで入れるホールっていうのが伊東にはなくて。私、静岡大学でアートマネジメントをちょっと一時期学ばせていただいていたんですね。伊東から静大に一年弱通ってたんですけど、その時いろんなホールに行かせていただいたら、すごい、席が全部動くホールとか、音響の設備も、伊東のが比較的ちょっと、なんて言うんですか、クラシックな感じの…で、海外から来たアーティストの持ってきたものとかと結構、なんて言うんですかね、接続ができないものとかがあって、国際レベルじゃないものが、機器が結構あって、それもちょっと困ったので。それで、結局機材を持ち込むと、そのコストも上がっちゃって、やりにくいって問題とかもあったので、ちょっとせめて標準レベルになると嬉しいなっていうのがあります。

多分、伊東だけじゃないんじゃないかなと思うので、できればなんか音楽とかそういう芸術文化をやってる施設同士で情報交換とか見学とか、あとイベントやってる人たちとその施設の人の交流会とかも、あったりするといいんじゃないかな、と思っています。そういう機会があるって私が知らないだけかもしれないんですけど、そういう機会があったり作れたりするといいんじゃないかなと思います。伊東は特に、宿泊施設がたくさんあるので、大きいイベントをやると、宿泊も潤うはずなんですよ。なので結局街も活性化できるはずなので、いいアーティストも呼べるようになると、やっぱり施設、その音響施設とかが良くなってると呼びやすいので、そうなるといいなと思っています。

それで、あとやってることの続きなんですけど、コロナになって、さっき音楽の（コンサート）が出来なくなったっていう話をしたんですけど、元々私美味しいもの食べるのが好きなので、SNSで結構食べたものとかの情報とか、お店の情報をシェアしてたんですね。なので皆さんがテイクアウトとか始めた時に、あ、なんかいいなって思ったんですけど、それがなんかうまく伝わってない、拡散してないなと思って、もったいないなと思ったんですよ。それで、その情報がもうちょっと伝わりやすいようにと思って、その発信するグループを作ってみました。そしたら今多分 1,500~1,600 人ぐらいのグループになりました。コロナになってすぐだったんで、たぶん 2、3 年経つのかな。本当は 1 年ぐらいでやめようと思ってたんですけど、始めてみたらお店の方からも、あれ

見て食べに来たお客さんがいるとか、食べに行った方からもあれ見て行ってるよとか聞くと、なんかやめられなくなってしまい、それもやっぱり静岡新聞さんにも取り上げていただいたりして、結局そのまま続けています。

それで、そんな美味しいものを食べて、人が交流する機会があったらいいなと思ったのと、自分がやっぱり移住してきて、人との繋がりが、自分の繋がりがやっぱり少なくて、誰に何を聞いていいのかもわからないみたいな状態で結構困ったので、きっとそれは自分だけじゃないなと思ったので、その移住者同士が交流できるランチの会っていうのをやりました。あと、いきなり何か食べに行くのって結構勇気がいると思うので、そのお店に行くきっかけとしてもいいなと思って、それもやったりして、なんかすごく喜ばれていて、またそろそろやりたいなと思ったら、またコロナが増えたみたいな感じなので、また落ち着いたらやりたいなと思っています。

やっぱり芸術文化って、何ですかね、よくある皆さんの商売みたいに、目に見えてその経済を活性するものではないので、後回しにされがちなんですけど、でもやっぱり私自身も、なんか中学生の時とか、特に音楽、音楽そのものとか、歌の歌詞ですごく救われたり、癒されたり、勇気づけられたりがすごくあったので、そういうふうには、なんかいろんな人を救えたらいいなと思っていて、音楽の活動を続けてるんですけど、なんかそういうのをもうちょっとやりやすくなるといいなと思います。チャレンジしたり、続けていく上で。一応今伊東市さんから年間何万円か補助金いただけたりとかしてるんですけど、でもそこに頼らず、自分でもっとできるようになってくのがやっぱり理想だと思うんですけど、結局続けていく上で。でも初めてやる人でも、なんかやりやすくハードルが下がるように、例えば、具体的な例であれなんですけど、図書館、伊東の図書館の上（生涯学習センター中央会館）の視聴覚室のピアノが調律されてなくて、あそこで私、合唱団のちょっと歌唱の指導させていただいた時があって、ピアニストは学校の音楽の先生だった方と工夫して、私バンドをやってるので、やってたんですけど、ピアノが狂っていると、ちょっとよろしくないんで、もうちょっと定期的に調律されたらいいなと思います。こちらでやる時もピアノ調律しなきゃいけないくて、ピアノの調律代って結構するので、そこもなんかもうちょっと補助があると、きつともっと素晴らしいアーティストとかも呼びやすくなるんじゃないかなと思っています。多分誰もこんなこと今まで言わなかっただろうと思うので、ちょっと細かいとこですけど。

あとはやっぱり、若い人が育っていかないと、どんな業界もそうだと思うんですけど、

先が難しいので、伊東で、その私今バンドとかユニットの練習する時は伊豆高原にある練習スペースで毎週練習をしてるんですけど、中高生はどうしてるのかなって思うんですよ。音楽をやっていると、練習する中で人の出会いがあって、そこから恋愛とかになって、結婚とかになって、子どもとかできてって人生が発展してったりすると思うんですけど、そういう出会いとかっていう機会とか、場所とかもあんまり…どうなってんのかな、伊東って思うので、そのなんか一助にもなると思うので、そんな学生の人が練習したり、交流できるスペース、音楽に限らず、があるといいんじゃないかなと思っています。

さっき知事も、なんかワーケーションのスペースとか、多分伊東で、あんまりなくって、話をして。あるといいなと思っています。ちょっと長くなりましたけど、このぐらいで。以上です。

【発言者4】 はい。皆さまこんにちは。よろしくお願いいいたします。

NPO法人えんはですね、伊東駅から歩いて10分ちょっとのところですね、ちょっと山がちな所のちょっと下の方なんですけれど、で小規模なデイサービスと、あとはこれも小規模保育所というんですけど、小規模保育所というのをやっております。どちらも定員がですね、12名で、もう本当に普段から顔の見えるような、お互いそういった関係を作れるような小規模な福祉事業をやっております。

デイサービスの方はですね、高齢者だけではなくて、主に成人が多いんですけども、障害のある方の日中の受け入れもしております、高齢者の介護、それから障害者、障害福祉ですね、あとは保育といったような形で、福祉事業を主にやっている団体です。

じゃあ、このNPO法人えんが何をしているのか、という所に行く前にですね、簡単に僕自身の自己紹介をさせていただきたいと思います。

今ね、会場にお集まりいただいている皆様には、お手元に資料があるのかなと思います。が、アフリカの農業から伊東の福祉の仕事へという形で資料がございます。ちょっと今この資料ですね、もう読める形になってますので、細かくはご説明しないんですけども、僕自身、伊東で生まれて育って、で大学から、伊東のよくある形なんですけれど、県外の方に行って、で10年ちょっとですね、県外にいて、で5年前に伊東に戻ってきました。いわゆるUターンというやつですね。それで、伊東に戻って来る前はですね、国内の福祉っていうものに全く携わることなく、主にアフリカの農業開発をメインとするような組織で仕事をしておりました。

住んでいたのは東京なんですけれども、大体2カ月に1回ぐらい、アフリカへよく、エチオピアとか、ウガンダ、マリ、ナイジェリア、ケニア、そういった国々にですね、出張で行って、現地のいわゆる零細農家に対する技術支援をするという、その組織での現場の視察だったり、そういったものを視察で現場のスタッフと話して、組織の運営に活かすというような、バックオフィス、管理系の仕事を主にやっておりました。大学も実は農学部なんです。なので、福祉系全然、もともと関係なかったんですけど、僕自身子どもが2人生まれて、海外の人たちとも話したり、いろんな海外のその潮流を感じる中で、一言で言うと、これからの日本大丈夫かな、自分たちの子どもここで育って大丈夫かな、ていうのをすごく思ったっていうのがあります。アフリカは、行ったことある方はご存知かもしれません。かなりエネルギーな国です。アジアとはまた異なるエネルギーがある国々、地域で、本当にいろんな人だったり、あるいは金だったりっていうものが集まるんですね。まだまだ発展はこれからっていう所なんですけれども、本当に世界中からいろんなものが集まるんです。

で、片やですね、まあ僕の生まれ育ったこの伊東、じゃあ同じように世界中から人やものが、あるいは金が集まるかといったら、なかなかそうではない。ってなった時に、これからその子どもたちが育っていく中で、やっぱり日本だったり日本の地域にですね、やっぱり自信を持って、育ってってくれたら嬉しいなど。そういう風に自信を持てるような、なんか地域づくりができたなら面白いなっていうのがあって。たまたま僕の母親が伊東でデイサービスをやってたんです。当時はデイサービスしかやってなかったんですけど、そこで取り組んでいた、世代を超える繋がりを作る、そういうケアのあり方ですね。まあ平たく言うと高齢者と子どもが一緒にいるんです。あるいは障害者もいるんですね。そういうつながりの中で、例えば高齢者が、認知症の方ですが、なかなかお風呂に入らない知的障害の方と仲良くなって一緒にお風呂に入っちゃうとか、あるいは子どもたちがすごく楽しく遊んでいるのを横目で見ても、普段自分で全く動かないおばあちゃんが、ちょっと子どもが危ないのを見て、自分で椅子から立とうとしたりとか、そういうすごくそのいろんな、属性の違うと言ったらいいんですかね、人たちが集まることで、すごい相乗効果というか、化学反応みたいなのが起こるのを、話に聞いたり見たりしてきたんですね。そういう、高齢者は高齢者だけ、あるいは子どもは子どもだけで集まるんじゃないで、いろんな、そこにいろんな人たちがごちゃごちゃと混ざることによって、すごく面白い人間関係ができる、あるいはお互いにとってメリットのある人間関係ができる

というのを知りまして、それで、これはちょっとこれから福祉、当時介護は3Kなんて言われてましたけれど、すごく面白い仕事だな、ポテンシャルのある、可能性のある仕事だなと思って、母親の事業をですね、継ぐ決心をいたしまして、それで5年前に戻ってきたという次第です。

それですね、3年前に保育園を作って、でデイサービスをやって、まあ今まだやっているところなんですけれど、じゃあ具体的にどんなことをやっているのか、っていうところで言うと、お手元の資料にですね、コロナ前とコロナ中の、今の、現在ですね、どんな交流してるみたいな写真がありますが、口頭でご説明するとですね、保育園作った初年度ですね、コロナ前だったんです。だから結構本当に身体的な接触を伴うような交流ができたんですね。例えば子どもたち、保育園の子どもたちが夕方とかですね、ちょっと親御さんの帰りを待つような時間帯、自由な時間帯です。そこに子どもの好きなおばあちゃんに来てですね、一緒に遊んでくれるんですよ。抱っこもしてくれます。あるいは絵本を読んだり紙芝居読んだりとか。そういうような光景があったんですね。残念ながらコロナになってしまって、身体的な接触を伴う、濃厚接触ですね、はできなくなってしまったので、こういう形での交流はできないんですけれども、感染対策をして屋外で、密にならないように屋外で、という形で、交流は今継続していて、例えば農業というほどではないんですけど、農的な活動と言ったらいいのか、デイサービスの庭に畑を作りまして、そこで農作業の経験がある障害者あるいは高齢者の方です、認知症の方ですね、と一緒に畑を管理して、そこに子どもたちが遊びに来て、収穫したりお世話をしたりすると。そういう間接的な繋がりを持って、交流をするというような試みを、ここ2、3年してきています。そういった形でお互いがお互いを身近に感じられるような、そういう場づくりを今取り組んでやっているところです。

僕自身の課題意識として、今本当に、前々からね、言われてることだと思んですけど、人との関係というものがどんどんどんどん希薄化していった。例えば町内会のような地縁組織であったりとか、あるいは職場間での人間関係もそうだと思うんですけど、飲み会が少なくなるとかね。僕は飲み会好きな人間なんで、本当は飲み会もっとあったらうれしいなって思うんですけど。そういうのもどんどん少なくなっていった中で、例えば子育てするにしても、伊東の、移住してくる親御さんの声聞いたりすると、やっぱり、子どもがいて、友達もいない中で、どこに、誰に何を話したらいいかわからないよとかっていう、いわゆる「孤育て」、孤立の「孤」に「育て」って書く「孤育て」です

ね、とかっていう、孤立化っていう問題が結構大きいなっていうふうに思います。あるいはその、それって若い世代だけじゃなくて、高齢者もそうなんです。どんどんどんどん独居、あるいは老老世帯というのが増える中で、身近に人間の存在を感じられる、そういう生活っていうのが、どんどんどんどん遠くなって人たちが増えてきている、というような状況の中で、どうしてったらいいのかなっていうのがあったんですね。本当に、何て言うんでしょう、人と人と繋がって、深い家族的な繋がりじゃなくてもゆるいつながりで、例えば挨拶をするとかっていうような、そういう軽いつながりであっても、その人の生活に豊かさだったり、あるいは幸福感っていうものが少しでもちょっと加わるんじゃないかな、っていうふうに思っています。そういうこともあってですね、福祉、従来的には高齢者は高齢者、子どもは子ども、あるいは障害者は障害者っていうように隔てられて、1箇所に集められるというか、言い方悪いですけど、そういうような形式で事業が運営されることが多かったと思うんですね。なんですけど、その垣根を超えて、せっかく集まるんだったら、なんかもっとお互いにとってプラスになるような、そういう関わり方ってできないかなっていうのがあって、やっています。

これから、今後ですね、まあ僕含めそのNPO法人えんとして目指していきたいのはですね、もっともっとやっぱりうちの事業所の中だけで、そういった人との繋がりを作っていくということだけじゃなくて、もっともっと、事業所の外にもそういったものを増やしていけたらいいなっていうのを思っています。今、例えば子育てで言うと、うち保育園やってるんですが、保育園に子どもを預けるって事は、ご両親あるいは親御さんですね、必ず働いて、だいたい働いてるんです。ってことはすごく忙しくて、なかなかその子どもと向き合う時間もなかったりするんですけど。最近お惣菜屋さんっていうのを始めまして、保育園にお迎えに来た親がお惣菜を買って帰れると。しかも保育園で作ったやつなので味もいいし、栄養バランスも考えられた、そういった惣菜です。そういうものを持ち帰って、なかなかね、夕ご飯6時ぐらいに帰って作るって結構大変なんですけど、そういうものを通じて、ちょっとでもその子育ての負担を社会的に、まあビジネス的にいうか、軽減する手が打てないかなと思って。コロナがもし落ち着いてきたら、そういう惣菜の販売をデイサービスの高齢者と一緒にやりたいな、と思っています。例えばそういったような形であったりとか、あるいはうちのケアのポイントとしては、その人の障害に着目するというよりは、その人ができることであったり、その人が好きなことであったり、興味があること、その人のストレンクスに着目するというケア

の考え方をしてまして、例えば、今コロナだったら、やっぱり屋外、今後も感染症がどうなるのかわかんないですけど、ちょっとですね、今企画してるのは、市内で一緒に農業系のNPOとですね、協働して、農作業を通じて、そこにいろんな人たちが関わる。で、子どもたちも、例えば収穫体験とかそういう形で関われるような、そういう日常的に何か一緒に作業をしながら、ゆるーく繋がれるような、そういう場を作れないかなっていうのを考えています。業界の用語で言うと農福連携というやつなんですけれど、そういうことができれば面白いなと思っています。はい。

そんな形ですね、本当にその、なんででしょう、豊かさっていうものをよく考えるんですけど、経済的な指標、例えばGDPとか、生産とかっていうところで、よく豊かさって考えられると思うんですけど、人間が感じる豊かさとかあるいは充実度、幸福ってそれだけじゃなくって、例えば自分自身の人間関係の質であったりとか、あるいは自分の存在意義っていうものをどう見い出せているか、っていうことであったりとか、そういうことに結構、あとはまあ仕事のやりがいとかもそうなんですけど、そういうことにその幸福感を感じる、豊かさを感じる事ってあると思うんですね。この福祉っていう仕事は、特に人間関係の質だったりとか、あるいはその自分の存在価値、存在意義っていうものを見い出すということに関して、ものすごく大きな強みを持つてると思います。だからそうした強みを生かして、福祉を通じて地域のまちづくり、地域づくり、まちづくりにつなげていくっていう発想が、今後はすごく大事になるんじゃないかなと思っております。

はい。というわけですね、静岡県に対してぜひお願いしたいこととしましては、以前から「ふじのくに型福祉サービス」という制度があるかと思うんです。僕すごくそれいい制度だなあと考えていて、もっともっと福祉の垣根を越えていく、例えば高齢者介護なら高齢者介護、障がい福祉なら障がい福祉、保育なら保育、そういうカテゴリーにとらわれずに、その垣根を越えていくような、そういう試みに対して、どんどん後押しをしていただけたら、すごく嬉しいなと思います。それって本当に目に見えない部分なんですけど、いわゆるソーシャルキャピタルというか、人間関係資本ですね、そういうものは蓄積、地域に蓄積されていくと思いますので、それで本当に豊かな地域が作られるんじゃないかな、というふうに思います。以上です。ありがとうございます。

【川勝知事】 発言者3さんと発言者4さん、共通するのは国際性ですね。伊東に根付

いてるわけですがけれども、おふたりとも目は世界を向いてるといふか、音楽はもちろん国境を超えるわけですが、発言者4さんの場合にはNPOと青年海外協力隊ですね、海外に行かれて、NGO、NPOですか、であちらの支援に従事されたということですから、本当に国際的な人間だなあ、ということを感じました。

また一方ですね、先ほどの発言者1さんは飛騨高山で、こちらは、発言者3さんは北海道札幌ご出身ということですから、まあ熱海にしろ、伊東にしろですね、人を迎えるってありますか、そういう風土性があるっていうのがですね、改めて実感した次第です。

さて発言者3さんはですね、音楽家でいらっしゃるということで、いかにして、子どもたちが小さい時から一流の音楽に親しめるようにするかと。ご自身のお子様が0歳5歳だったことも、これはもう本気でそれをやらないといかなくてことだったと思いますけれども、そうして初めて伊東を見た時に、発言者3さんの水準に達した施設がないということでしたので。伊豆と言えはですね、どちらかという文学なんですね。川端康成さんだとか、その他もろもろですね、もう文学との結びつきが非常に強いと。だけど、発言者3さんが言われてるのは音楽なわけですね。音楽というのはこれ、言葉いりませんからね。ですから国境を超えるので、これをですね、伊東から発信していったらどうかという。

偶々ですね、今日の新聞ご覧になったでしょうか、静岡新聞。一面にですね、静岡県が来年の、東アジア文化都市に内定したと。それで明日、なんて言うんですか、認証式ですか、それが行われると。私はこれは認証されるまでですね、言うなと言われてたんですけど、新聞にすっぱ抜かれましたので、言うわけですが、明日はその三つの国、東アジアですから、日本と中国と韓国の文化大臣が、WEBでしょうけども、一緒になって、日本の文化都市は静岡県を指定すると、ということになるわけですよ。そうするとですね、例えばこれをきっかけに、静岡県全体で文化芸術を、文化都市ですから、静岡全体の文化芸術をですね、集中的に、日本を代表して発信するという、そういう役割を持つわけですね。

ですから、この発言者3さんのような人がいらっしゃるので、伊豆音楽フェスティバル、ジャズを中心にといふとかね、別にクラシックとかっていうような意味だと富士山静岡交響楽団というのがありますから、それとは別個のジャンルですね、そういうフェスティバルができるんだと。ちなみにその昔、今もありますけども、エディンバラの

なんとかフェスティバルというのがあるんですけど、何もなかったんですよ、夏は。それをですね、お城しかないと言ってたわけです、エディンバラ城が。そこでですね、サマーフェスティバルみたいなものやって、世界のフェスティバルになってます。ですから、何かきっかけがあると、そういうふうにして育っていくわけですね。そうしたきっかけに、ひょっとしたら東アジア文化都市の指定がですね、なればいなど。

しかしそれを支えるのは県民であり、また地元の人たちですから。こういう景色のいい所で美味しいもの食べながらですね、そして心の充実を楽しむと。それでやっぱりその前に、場所はどこにするかっていうことですね、たまたま伊東で大問題になったのは高校の合併だったわけですよ。そのうち、合併したのでですね、学校が空いてるんですよ、1つ、芸術関係の。そこはどうされるのかなと、今お聞きしながらですね、芸術に関わる学校でしたのでね、高等学校でしたので、そこが使えるかなと一瞬思いましたけども。伊東市長さん、公用でパッと今帰られましたので、もしいらっしゃったら聞けば良かったんですけども、ちょっとそういうのが浮かびました。ですから場所はないわけでもない。

それから学校でピアノ、昔はオルガンだったかもしれませんが、今ピアノですね、その調律っていいですか、音程が狂ってるので弾いてるっていうのはよろしくない。で私は、もうすごい音感のある方たちが県内にいるはずですよ。伊東市内にも熱海市内にもいらっしゃるはずですよ、そういう人たちにですね、学校のピアノの調律をですね、頼むことはそんな難しいことじゃないのではないかと思います。場合によっては調律師を雇うとなれば高くなるかもしれませんが。音感の強烈な人はいらっしゃいますから、そういう人たちも活用すればいいかなと、ちょっといい加減なことは言えませんが、やはりいい音楽を小さい時からきちっとした音階で聞かせるということの大切さを思いましたね。

それから、美味しいものを発信するとおっしゃいまして。これもですね、静岡県にはもう伊豆も含めてですけども、食材が日本一なんですよ、439品目あります。農産物から海産物からね、しいたけを含めた林産物も含めてあるわけですよ。これは日本一です、食材の数は。だから春・夏・秋・冬違う食材が手に入るわけです。例えばこちらですとわさびが世界農業遺産になってますから。そうしたものも含めて、すぐ近くには金目鯛もありますね。まあとにかくその山の幸、野の幸ですね、いろんなものがありまして、その組み合わせは、日本料理にしたり、イタリア料理にしたり、そしてお友達がイタリ

アとかスウェーデンとかですね、オランダにもいらっしゃるということですから。食はですね、人はそれなしで生きていけないので、そういう食と、それから音楽というのはですね、組み合わせると、ガストロノミーツーリズムって最近の言葉で言うそうですが、食文化を通じた観光ですね。そしてそこに音楽が加わるとですね、非常なる強みだということで。伊豆半島は美味しい半島であると。伊豆半島はその何と言いますか、音楽がですね、その音楽の半島であるというふうなですね、イメージを、今までこの文学の半島、あるいはジオパークの半島ということから、芸術文化というものを、そしてプラス食ですね、そういうものにちょうどこういう方を通じて生まれ変わらしたらどうか、というふうに思いました。

偶々ですね。発言者4さんは新潟大学の農学部を出られてるって事で、まあ大変なかしくし玉でらっしゃいます。そして青年海外協力隊、これは試験を受けなくちゃいけません。そして、いわゆる政府派遣のですね、開発途上国への留学なんですね、言ってみれば。いわゆる先進国へは通常留学って言いますけれども、開発途上国にはですね、青年海外協力隊という形で、海外の経験をさせる。ただしですね、一定の能力を持ってる人しかできないわけです。だから、発言者4さんはここにも書いてありますけど、理数科の先生として行かれた。しかし専門は農業ですから、したがってアフリカの食糧事情、あるいは農地の事情をですね、パッと見て分かれたでしょ、これはこうしなくちゃいけないとか、こうできるとかですね。それでこのNPO法人に入られてアフリカの支援に10年間やってこられたと。そしてお母さんとの関係で帰って来られたってことですが、親孝行だってことじゃないでしょうか。

それでですね、保育所と、つまりは小さな女の子・男の子とですね、おじいちゃん、おばあちゃん。お父さん、お母さんってのはどちらかっていうと子どもに対して欲がありますよね、期待が強いというのがあるんじゃないかと思えますけども、おじいちゃん、おばあちゃんとその孫の世代っていうのはですね、これ愛情しかないですよ、両方とも。子どもは遊びたいと。おじいちゃん、おばあちゃんは欲はなくて愛情しかないわけですね。それを結びつけるっていうか、すごく相性がいいと。相性の良さをどういう風にするかという工夫を発言者4さんはおっしゃったんじゃないでしょうか。絵本を読み聞かせるとか、あるいは農業を経験したことのある高齢者の方に、その子どもたちと一緒に物を作っていくと。ただそういう経験だけじゃなくてですね、なにしろ農学部出て、そういう農業支援をやってきた方ですから、それを製品にして、お惣菜にしてですね、

持ち帰って、買ってもらって持って帰ってもらうという。ですからこの方はですね、おそらく大化けするんじゃないかって気がしましたね。

つまり単に、単についていうとおかしいですけど、福祉を通じて、その高齢者と保育園、保育児を結びつけるだけではなくてですね、農業が入っておりますし、そこにつながりをどのように作っていくか、という発想がありますから。その発想はですね、一番最後に言われましたけれども、広げていきたいとおっしゃってるので、でもそういう広げることに対してはむしろこちらからですね、知恵をお借りしたいぐらいです。でも、そういうふうにしていかななくちゃいけないと。そして、障害者といわゆる健常者ですね、これはもう誰もがですね、歳いくと身体が言うことを聞かなくなったり、あるいは病気したりですね、いわゆる障害者のようになっていくわけですね。だから完全な健常者もいないし、完全な障害者もないわけですが、これ中間にあるわけですね。ですから、そういうところでの差別というか、それをしてはいけません。これはもう静岡県の基本方針です。だからこの基本方針が当たり前になるようにしていく社会にしていこうということが大切だと。

そういうわけですね、発言者4さん、サポートしてくれと言われましたので、こちらサポートさせていただき、またいろんなご経験がありますので、教をを請いたいというふうに思いますし、地域局長にですね、もう好き勝手なこと言っていただいてですね、それで、できることとできないことに対してきちっとお答えするというふうにしていけば良いかなと。ともあれ、発言者2さんも世界展開と言われました。そしてですね、音楽を通じて、あるいはまた農業を通じてですね、もうまさにSDGs、貧困とか飢餓とこういうものをですね、何としてでもなくしたいという、これがですね、福祉というところにですね、これ福祉の心ですから、そこがですね、発言者4さんの中に生きてるので。

今日の4人のお話はですね、それぞれ分野、ご活躍の場は違いますけれども、前向きで明るくてですね、伊東や熱海を軸にしてこれから時代が変わっていくなあってことを予感させるお話を聞いたという感想を持ちました。ありがとうございました。

【東部地域局長】 ありがとうございました。だいぶお時間も過ぎてまいりましたが、もう少しなら時間があるかなと。先頭でだいぶ緊張した中でお話しされたでしょうから、発言者1さん何かもし一言、何か追加であれば。

【発言者1】　そうですね、私たちは本当に熱海、さっき知事もおっしゃったように、熱海では実は63%も森があって、ていうところに非常に驚いたんですけれども。そう
いった時に、やっぱりなんかその社会の穴を埋めるっていう事って、この林業に限ら
ず、皆さんのお話の中でもあったような事っていういろいろあるのかなと思って今日私もお
話を伺いました。そして人一人ではできないことが、みんなが力を合わせれば、できな
いことはないなというのは、私も森と一緒に対峙してく中で、逆にいっぱい恵みを受け
ながら学ぶことも多いですので、本当にそういうふうに勇気づけられる話がいっぱい聞
けて、今日も良かったなと思ってます。ありがとうございます。

【発言者4】　今日ですね、僕も、他のお三方、それからもちろん知事も含め、いろい
ろ貴重な話をいただいて、すごく、非常に参考になったというか、すごく励まされる気
持ちで今この場におります。それで、いま本当に発言者1さんもおっしゃったんですけ
れど、なんか目の前にこういうなんとかしたい課題があるなってなった時に、単独では
やっぱり解決って難しい、改善って難しいなって思うんですね。なんかそういった時に、
自分のその所属、あるいは会社を超えていろんなその知見を持つ、強みを持つ、個人だ
ったり、団体さん、会社さんと繋がって一緒に向かって行くって、すごくこれからの時
代大事なことかなっていうふうに感じています。SDGsでも、ちょうどパートナーシ
ップについて言及があるんですけども、本当に例えば、今、具体的な話を言うと、う
ちのデイサービスで最近木工所を作り始めまして、熱海で出た間伐材とかそういった原
料ですね、もし供給いただいたら、いろいろ高齢者あるいは障害のある方と一緒に何か
製作できるんじゃないかなと思ってみたり、あるいは農的な部分で言えば、発言者2さ
んの知見を、もうすごいやっぱりものすごい推進力をお持ちでいらっしゃるんで、そう
いったところからすごくいろいろアドバイスいただいたりとかっていう形で、何か、例
えば伊東と熱海っていうその行政の区ですね、それも超えて何か一緒にすごい共創でき
る、そういう繋がりが作れるんじゃないかなっていうふうに思います。はい。

【発言者2】　伊東と熱海って少し特殊な部分があって、近いけど遠いっていう存在が
あると思うんですけども、そこをこういう場を使って、熱海・伊東が繋がって、もっと
良くなるような方向性を見出していけるようなことはできるんじゃないかな、と思って

います。

橙もそうですけども、伊東と熱海、そこで生産されているので、そこを一緒にまた繋げていくことができれば、熱海だけではなく伊東も、静岡県としても、もっと良くなるんではないかなっていうふうには思います。

【川勝知事】 発言者1さん、木工所があるんですって。

【発言者1】 すごく興味深くお聞きしてて。私たち結構やっぱり自分たちで何か中の人たちだけでやるっていうことはあまりやらなくて、それは木に近いところでやるからこそ、アイデアが出づらい時があるんですね。そういった時にこの前も熱海の子どもたちが企画した木工の作品が非常にとっても良くて、それを私たちが何か体験のメニューにするなどさせていただいて。ですので、ぜひその木工所のやられてる方々のお知恵とですね、何かそこもまた化学反応があったりするのかなと思って、ワクワクしました。ぜひ組みわせていただければ嬉しいです。

【発言者3】 今の聞いてても思ったんですけど、私が最初にイベントやろうと思った時に、なんか相談する人がいなくて、何か始めたい時にどこに何を相談していいかわからなくて、そこで止まっちゃうもったいないことが結構起きてるんじゃないかと思うんですよ。それをたぶん最初に何かやる場所が、こういう公共の施設の場合って、結局最初に市に行くことになると思うので、その時になんかイベントやる時に、なんかこういうの今までやった人いるから、なんかこの人に相談するといいいよとか、こういう人、面白い人がいるよとか、何かそうやって繋げる機能みたいなのか、相談する先を紹介するとかいう、やっぱり人の繋がりが結局すごく大事だと思っていて、その相乗効果で、なんか相談を受けた人も、それでなんか自分もこういうのやりたいな、みたいになって、どっちも盛り上がってくみたいになっていくと、街自体も楽しくなると思うんです。

それで、ちょっと余談なんですけど、私伊東が引っ越し20回記念なんですよ。今まで一箇所2年以上住んだことなかったのが、もう伊東6年経っちゃって、それぐらい伊東楽しいんで、なんか同じようにもっと伊東楽しく住める人が増えたらいいなと思っていて。なのでまた、そういう交流する機会も増やしていきたいなって、なんかまた改めて思う機会になって。今日は本当に良い機会をいただいてありがとうございました。

【川勝知事】　こういう4人のやり取りがですね、あったのは76回目で初めてです。

そしてですね、これは発言者4さんが、農業、木工ということですね、発言者2さんと発言者1さんに繋いだから始まったんですけど。だけどこれは、なぜそれを言うのかというので冒頭ですね、SDGsのパートナーシップとおっしゃいましたが、そのSDGsは御案内のようにですね、17のゴールを持ってるわけですね。そして一番最後にパートナーシップ、つまりお互い繋がっていきましょうという、協力していきましょうと、これを謳ってるわけですよ。それ実践されてるわけですね。ですから、これ木工絡みあるいは橙絡みですね。もしこの(NPO法人)えんとそれぞれのご活動がですね、行政区を超えて繋がると素晴らしいなど。それからですね、何しろあの20回記念とおっしゃったのでですね、発言者3さんが。こういうですね、遊牧民みたいな人が世界にはいるというわけですね。それを定着させる力を伊東が持っていたという。

ちなみに、伊豆半島の反対側ですけど、沼津ですが、あの昔なんて言ったっけ、若山牧水っていうですね、「幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく」っていう、本当のこの放浪の歌人だったわけですけど、その人の足を止めさせて定住させたのが伊豆半島だったわけですね。ですからそういう魅力がですね、伊豆半島にはあるのじゃないでしょうか。ですから、そうするとしかし初めて来た人にとっては不安ですから、ですからこのところはこの遊牧タイプですね、発言者3さんが、移住者同士が気兼ねなく肩肘張らないで会話できるというか相談できる場所が欲しいと言われたので、これはですね、ぜひ熱海・伊東協力してですね、そういう移住してきた人たちの困ったことも相談する場所のような所ですね、持っていただきたいと思いますね。

それで、実は2020年度、このコロナが入りまして2020年度、一昨年度ですが、この年にですね、静岡県始まって以来、移住相談が一万一千件を超えました。そして実際に移住してきた人がこれも過去最高で1,398名だったわけです。世帯主の年代別が分かっております、それが30代前後が81.7%、5人に4人以上がですね、子育て世代の人だったわけです。ですから子ども育てるからお金かかりますしね、いろいろ不安もあるでしょう。だけどこっちに來られてるわけです。それから2021年度、昨年度ですけれども、なんと移住相談はさらに増えまして、一万件をはるかに超えてですね、そして実際に移住してきた人が1,868人になったわけです。4,500人増えたんですよ。しかもあの83%以上、すなわち5人に4人以上がやはりですね、30代前後なんです。ですか

らですね、30代前後で、こちらに東京とも近いとか、あるいはインフラがよく整備されてるとか、景色がいいとか食べ物がいいとか、人が親切だとか、様々な総合的な条件によって移住者が増えてるわけですね。これからますますそういう傾向は強まると思います。したがって、発言者3さんのような方がおっしゃってるんですから、よほどのことありますから、やはりすぐに相談したいという人が必ずいるのでですね。そういう場をやはり、こういう世界に開かれた熱海・伊東ですから、ここはですね、一緒に、熱海は熱海で2つくらいの窓口を作るということで、地域局長にも、市長さんにもお願いをしてですね、なんとかそういう場所を、確保するようにいたしましょう。以上です。

【東部地域局長】 ありがとうございます。お時間が迫ってまいりました。

せっかくの機会でもございますので、ここで会場の皆様やオンラインでご覧いただいている皆様もいらっしゃいますので、ご意見を頂戴したいと思います。

それじゃまずは会場の皆様で何かご意見、ご質問等がある方がいらっしゃいましたら、お手を挙げていただきたいと思います。

【傍聴者1】 こんにちは。私は伊東の国際交流協会に15年ぐらい在籍している傍聴者1と申します。

まず、以前熱海の起雲閣で「平太さんと語ろう」という時にもお邪魔したので、さっき知事がおっしゃったように、こういうスタイルで登壇者同士が交流があったっていうのは、とても意義のあることだと拝聴しておりました。

それでまず私、実はたまたま昨日伊東国際交流協会の広報委員会の会議がありまして、明日「平太さんと語ろう」に出席させていただくのよと話したら、先ほど知事からもおっしゃいました、伊東の高校の統合、合併のために、伊東高校が空くんですけれども、その建物はそのまま維持するということまでは聞いてらっしゃるそうなんです。それで、伊東には伊豆フィルハーモニーという大きな人数の楽団もありまして、そういう方たちがやっぱり、そういう場所を使わせていただきたい、ということで、伊東市役所やそういう所にもすでに打診はしているんですが、県立ですよ、伊東高校、県立なので、今日知事にお会いになったら、知事がご存知かどうかわからないんですが、学校のその後の活用というのは、県の方でどのように考えてらっしゃるか、私ではなくて、その会議に出席した者から頼まれてきたものですから、たまたま知事がおっしゃって

ださったので、話しやすくなって手を挙げてしまいました。何かご存知でしたら教えてください。

【川勝知事】 いいお話で。傍聴者1さんですね、国際協会さすがですね。青年たちのことを考えていただいて。まずありがとうございます。伊東市民のあるいは伊東青少年のためにあった高校ですから、したがってですね、こちらの方たちが無理をして合併したわけですね、ここに行く人数が少なくなったってことで。ですけど場所はですね、人が通える所に高校って立地しているので。ですからここはですね、活用、いい形で活用すべきだと。出来る限り公共性があつた方が良く。しかも、フィルハーモニーまであると。

今日は音楽の話が発言者3さんから出ました。ですからですね、これを僕は教育委員会に伝えます。今の教育長は池上という、この5月から新しい教育長に代わりました。外国の方たちも日本人もですね、一切差別なく、静岡県ではですよ、多文化共生という言葉が使われてますけれども、特に子どもたちを大切にしながら育てていきたいということで、ずっと尽力してきたのが新教育長の池上重弘先生です。ですから彼に確実に伝えましてですね、上から何かこうしてくれとか、しなさいとかっていうことを一切言わないように、これはやっぱり私は基本で、彼はそうすると思います。それで、この教育の方に、政治って言いますか、が圧力をかけるってのは避けねばならないんですね。ですから私の方からはですね、アイデアがあると、このアイデアはすごくいいと思うということは、そのままでお伝えしたいと思いますが。ぜひそれが活かせるようにですね、教育長にこちらに入っていて、国際交流協会の幹部の方たちや、伊東市民の方たちと会っていただき、また卒業生の方ともですね、会っていただいて、実は彼は何回もここに来てるとは思いますけども、跡地利用について、後の校舎の利用についてはまだですね、本決まりになっていないというふうに思いますが。せっかくですから、こんなきれいな所で景色もいいでしょ、あそこは。ですからですね、人もいいし。定着させるぐらいですから。音楽はそういう惹きつける力の非常に大きな分野です。ですから芸術分野ですね。なんか使われると、他にも使われるかもしれないけど、そういう形の使われ方ができればですね、素晴らしいと思いますね。さしあたって私目下の考えでございます。

【傍聴者1】 ありがとうございます。早速、頼まれた者に報告したいと思います。

ただ、再利用する前にその活用を県が伊東市に許可していただかないとできないみたいなことを言われたらしいです。県立だからということで。小中学校も合併してますけど、あれは市のものなんですけれど、高校は県立高校なので…。

【川勝知事】 わかりました。教育委員会というのはですね、教育は中立性、継続性、安定性という、これ基本でして、一番大切なのが中立性ということで、それは何を言ってるかという政治家が教育の世界にですね、政治家の価値観を押し付けてはいけないと。これが戦後の基本になってます。戦前の反省で。ですから私もですね、実はこれやってるのは、知事やってるのはですね、大学の職員の人たちが政治運動し始めてですね、それを私は、絶対にしてはいけないということを厳しく理事会で批判して。批判することは、批判された人は厳しいですよ。言ってみれば喧嘩売ったようなものですから。ですから喧嘩両成敗ということで、私は自らを成敗して辞めたわけです。ですからですね、その教育の世界というもののところに、私自身がこうするのがいいよっていうような強いことをですね、言うことはできないので、必ずお約束して、こちらのですね、県の教育委員会の所轄なので、そこは市民の意見をよく聞いてですね、後でみんなに喜ばれるようにしてください、というふうに伝えますので、ご安心下さいませ。

【東部地域局長】 ありがとうございます。

それではここで、オンラインでご視聴いただいている方もいらっしゃいますので、少しご意見、ご感想を紹介させていただきたいと思います。

一点目が、熱海キコリーズ様と静岡県と共同で、太陽光発電所整備で破壊された、破壊され崩落した山に植樹活動することで、森林整備の見本となると思います。というようなご感想をいただいております。

それからもう一点でございます。

伊豆山の土石流により堆積した土砂を長浜海岸の埋め立てに使うことについて、土砂が汚染されている可能性が指摘されている。これに対して県と熱海市との責任の所在が曖昧で、かつ一部の市民にしか知らされていなく、熱海市の広報では取り上げられていないというようなご意見をいただいております。

ご意見については承りましたので、県と熱海市との役割分担、これを確認しなきゃい

けませんけれども、所管する部署に対していただいたご意見をお伝えさせていただきます。